研究雑話(11)
体温計の開発と障害児教育：セガン、ブルネヴィル、ベルナール、三人を結ぶもの。
E・セガン以降、大事なことといくつか(二)

藤井　力夫

前回は、「パリ・コンミューンと障害児教育」ということで一八八二年から八九年にかけてのビセートル精神病院における院内学校、職業教育の設立についてお話しました。D・M・ブルネヴィルに代表される「医療の社会化」の流れの中で、看護学校の設立、産科での出産に対する公的扶助の適用などとともに実現しました。当時の教職員組織からみて現代フランスの養護学校教育の原型といえるものです。現代フランスの障害児教育については何回か後にお話ししていく予定です。

ところで、アメリカに渡ったE・セガンとフランスでのD・M・ブルネヴィル、この両者を結ぶもの、それは体温計です。一八七〇年代初頭、それぞれ別個にその臨床応用に熱中していた。きわめて興味深い。

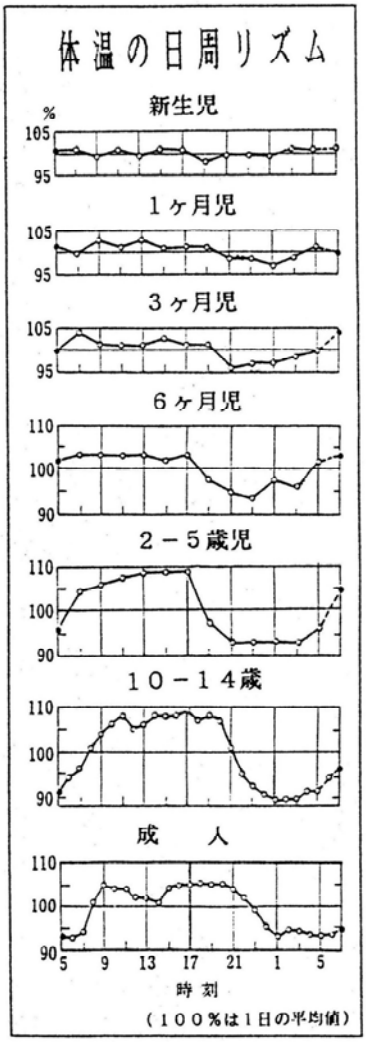
体温計の制作はガリレイの時代(一六二五年、S・サントリオの口腔体温計)からはじまるが、簡便なものは難しく、我々が使っている水銀体温計は一八六四年以降のことで、ドイツのK・ウンデルリッヒが数千例の臨床報告を行ったのは一八六八年のことであった。

そして、この体温計を誰よりも早く利用し、研究したのが、我々の先輩であるこの二人であった。しかも理論面、体温調節の内部メカニズムでは、現代医学の基礎を築いた『実験医学序説』のC・ベルナールが介在している。なんという結びつき。まさに障害児教育は現代科学の申し子として誕生したことになる。

アメリカでのセガンは、一八六六年「生理学的教育方法」の体系化と、ウィーン万国博アメリカ代表としてのヨーロッパ教育視察報告、これ以外はすべて体温計の利用と普及に関する研究であった。「朝、子どもの顔色を調べずして授業を始めてはならない」。「戸外でできる活動を室内でしてはならない」。等、セガン教育の原理からして了解できる。では、ブルネヴィルはどうであったか。一八六五年医学部を卒業、前回記したようにビセートルでデラシオーブのもとで住み込み医師になる。精神病棟での子どもの治療、コレラ患者への治療等を経て、一八七〇年臨床的検温に熱中、博士論文を提出。一八七三年、神経系の病気についての検温的、臨床的研究を発表。一八七一年パリ・コンミューンでの政治的態度の表明前後、彼はまさに臨床的検温に熱中していたのであった。

図は、体温の日周リズム。夜間継続八時間睡眠が可能となる三ケ月児で日周リズムが安定しはじめる。このデータは最近のものだが、いずれにしても生体の内部から個人を理解しようとするものであった。C・ベルナールは言う。「生命は生体と環境の物理化学的状態との間の闘争の結果である」。子ども時代をどう燃焼させるか。体温計への接近は教育への哲学を内在していたと言える。

(北海道教育大学助教授)



K．ウンデルリッヒ(水銀体温計の開発)
　1868年：病気と体温の関係

E．セガン(アメリカでの著作)
　1866年：白痴、生理学的方法によるその治療
　1870年：白痴についての新しい事実と特徴
　1873年：家庭の体温計；母、看護婦、病院関係者等、病気と子どもの保護に関わるすべての人のためのマニュアル(72p)
　1875年：教育についての報告
　1875年：臨床的体温計と体温(8p)
　1876年：体温計と人間の体温(446p)

D．M．ブルネヴィル
　1872－73年：神経系の病気に関する臨床的・検温的研究(1巻)
　1873年：腸チフスに関する臨床的・検温的観察研究(81p)

C．ベルナール
　1876年：体温、体温の影響および発熱に関する講義(1巻)